

絕壁

井山夏一節

改造社版

绝壁

井上友一郎



昭和二十四年十月十日印刷
昭和二十四年十月十五日發行

絕壁

定價貳百圓

著者

井上友一郎

發行者

平田貫一郎

印刷者

東京都中央區京橋一ノ三
塚田忠雄

發兌

東京都港區芝田村町五ノ二五
改造社

振替東京八四〇二番
電話東京(56)五一六六二九〇

印刷所 東京都港區芝田村町五ノ二五
製本所 東京都港區芝田村町二ノ一
三興社 印刷所 高製本所
株式會社

目次

絶	壁	三
續絶	壁	五
魔	女	一〇九
白	夜	一四九
あしのまろや		一八七
三文ホテル		二一五
あとがき		二五三

裝
幀
小
穴
隆
一

絶

壁

欣也は、世に謂ふ、枕を高くして寝ることのない男である。夜なかに、突如、「う、う、う」と自分の聲で眠りを破つて、それがむなしい夢だと覺るや、ああ、よかつたと思ふ心で、神經的に、寢床をつらねる彌千代の氣配をビクビクしながら窺はないではゐられなかつた。

「ああ、びつくりした……だが、ずるぶん他愛ない夢をみたな」欣也は、暗がりに瞳を定めて多分彌千代が起きてゐるのをそれと覺れば、先手を打つて、相手の腹を探らうとする。

やや性質はちがふけれども、欣也以上に神經のはしツこい妻の彌千代は、さうその欣也の含みを持つた一ト言で、見るからにうとましい氣分に陥り、時ならぬ皮肉な問を交へることが珍しいことではなかつた。

「眠れないの？」

「いや、寢てたんだ。しかし、うつらうつら夢をみて、うなされたやうだけれど、ぼくは何か變

なことはないかつたかい」

「ウフフ……」と夜具を顎まで引つ被つての冴えない含み笑ひを洩らしながら、彌千代は、そんな欣也のこまかい氣の配り方が氣に食はなかつた。「うなつてましたよ。いやな聲よ。——あなた、また氣にかかる女の人でも出來たんだわね？」

「飛んでもないさ。出來たら、きつと、のうのうと夜くらゐ愉しく寝るア……」

「あんなことを。——ぢやア、あの、きのふ掛つてきたあの電話はどういふ人なの？ あたくし、何もかも分つてゐるのよ。あれは、ちよつと普通ぢやアないわね。でも、いいわ。あたくし、どうせ街のつまらない女なんかは本氣で心配してゐないわ。今更、あなたも子供ぢやアあるまいし、あとさきは何でも心得て遊ぶ人だと思ふですもの、人がいふ程、やきもきしたこと一度もないわ。だけれど、これだけは心得てゐてぢやうだいね。お互ひ、軽い身分ではないのですわよ。あたくしたちは闘ひ抜いてきたわけなのよ。世間といふものとも闘つてきたのですし、又、あたくしにしてみると、かうして、あなたと一しよになるため、どんなに、自分の魂と闘ひ抜いたか知れやしない。——物笑ひはいいとしても、いまになつて妙ちきりんなことでもあると、あたくしの一生は元も子もなくなるわけですからね」

又、始まつたといふやうな暗い気分が、少しづつ欣也の胸にひろがつてきて、彼は、彌千代が理に落ちた口上を述べ立てれば述べ立てる程、その裏にかくされた情念のまたたきを無關心で眺めやることが出来ないものである。欣也はことし四十二だが、彌千代は十一も齡上の五十三だ。本来、世間の標準から考へると、もう夙くに女のがつた齡頃であつたけれど、さすがに若い美貌の男を射留めただけのことはあつて、ちよつとみると、彌千代を欣也とほぼ同年に思ひかねない人間さへゐて、五十三だよ、と聞かされると、へい、あの人が……やつぱり、女は魔物だねえ、と寧ろ驚嘆の眼をみはる人が多い。彌千代の前では、年齡のことを持ち出さぬのが禮儀であつて、親しい他人はもちろんだが、いまでは當の亭主である欣也までが、五十三であれ何であれ、すべて一切、年齡に關はつた話柄を口にするこゝさへ禁物にしてゐるけれど、周圍で、その種の神經を配つてゐるな、と氣付くことさへ彌千代の心を傷けることになるのだ。だから欣也は、日頃、努めて彌千代の齡を忘れたつもりでゐるのだつたが、今夜のやうに左程のきつかけもないところを、ああだ斯うだと理窟ッばい厭がらせを聞いてゐると、やつぱり齡で、彌千代も、まさに女としては殘燭の消え果てんとする心境に似た苛立ちを持てあましてゐるんだわいと思はぬわけにいかかつた。それはいいが、しかし欣也の身にしてみれば、彼女の嫉妬が、いつも一段高所から天

降りの降り濺いでくることで、二タ言目にはお互ひに軽い身分でございませんの、かつて苦しく闘ひ取つてきた自分たちの戀愛だの、と勿體付けての束縛である。まして、その心根には、街の女給やダンサアなどといふ種類の女たちを、あたまから輕蔑してゐて、もし假りに欣也が、その種の女たちと若干の關はりでも持つとなれば、それで傷けられるのが彌千代ではなく、却つて當の欣也だらうと決め込んでゐる高慢ちきな論法を、欣也は何よりもしやらしく思ふのだつた。

しかし、欣也も彌千代に對してあたまのあがらぬ點があつて、それが二重に欣也を彼女に縛り付けてゐる節があるのだ。彌千代は、世間で、所謂知性ある新しい型の婦人だといはれてゐるが、二人の無理な不自然極まる結びつきも、實は、さういふ穴に陥ち込む情痴自體を世間の人は、やれ知性だの、封建主義へのプロテストだのといつてゐるが、揆つたいのは欣也だけではなくて、内心、おそろく彌千代だつてチャンチャラをかしい筈であつた。二人が一しよになるまでは、彌千代は社會運動家として名のある新垣徳三郎の夫人であつたが、この新垣の性的な或るルーズさに、あらぬ孤閨を悶々として過してゐたのを欣也の美貌と辯舌とがたやすく捉まへてしまつたのである。欣也はその頃、無名の音楽青年だつたけれど、三十二歳といふ年齢が含んでゐる不安定な憂鬱を、一種、才能の鬱勃たる未來性だと解した彌千代が、先き物質ひのその冒險を、欣也自

身の水もしたたるやうな美貌にすりかへての戀愛沙汰になつてしまつた。彌千代は十分満たされなかつた性のやり場をいはば欣也の才能開發に仕向けたと思つてゐるが、それは動機で、結果ではない。又、眞の目的であつたか否かといふことさへ、なべて漠たるこの種の男女關係のさなかにおいては、當人にさへもよくわからなくなる事柄だつた。ただ、他人の窺ひ得られぬ兩人の秘密を土臺にいふなら、彼等が一しよになつた歡びを動物的に享受したのは彌千代である。彌千代は欣也が氣に入つたのだ。それは、いかに透徹した判斷と想像を以てしても、絶對に圖り知られぬ、又、圖り知られぬことが當然たるべき性の或る點について、氣に入つたのだ。つまり彌千代は、人間といふ動物として、この、みめ美はしい三十いくつの音楽青年の愛撫に捉まへられてしまつたわけだが、かかる官能の歡びを與ふ限り永續させたいといふ慾望が、彼女を驅つて、欣也を立派な音楽家に仕立てたいといふことになつてしまつた。この仕事は、すこぶる困難を極めるものだが、以來、十年といふ風霜にも挫けることなく、只管、彌千代が成し遂げてきた所謂世間的な闘ひの跡を辿ると、それは一應、曲りなりにも成功を示したといふことになるかも知れない。彌千代は、欣也の精神といふものを、つねに高^{ハイ}級^{ロウ}の状態でわがものにするために、最も露骨な動物本能を利用して、先づ女好きする欣也を、性の、あらゆる幽玄な極致で満足させようと努め

たし、又、その道を手落ちなく押し進めるため、彼女は、不斷に、自分が若くならなければなら
ないと丹精した。彌千代にとつて、二人の齡が、十一も隔つてゐることは、不利でもあるし不快
でもあつたから、先づその溝を埋めるために、彼女は最初の三年間で、三ツ若返る努力を果し、
中頃の三年間で、又、三ツ、若返つて、更に、終戦このかたの三年間で、又、三ツ若返つたので、
いまでは彌千代を四十二三に思ふ人間もあるくらゐになつてしまつた。しかし、彌千代は、さう
いふ金に絲目をつけない美容や服飾ばかりにウツツをぬかしてきたのではなく、欣也を、立派な
音楽家に仕立てあげてしまふための努力さへ數々盡した。とはいへ、これは、前者にまさる困難
な道であつて、肝腎の欣也自體の才能がヤクザなガラクタに過ぎなかつたらどうにもならない。
欣也がガラクタであるか否か、これは、いまでも欣也自身にはわからぬことで、又、彌千代にも本
當のところかわからぬ。それなら世間の評價から推し量れば、その回答が曲りなりにも出さうな
ものであるのだけれど、まことに厄介極まることには、世間も、いつかう音をあけない驚の聲の
美醜を論じることが出来ないのである。だが、そのやうに、たやすく音をあけない驚に仕込んで
しまつたのは彌千代であつて、生れながらに手の込んだ商才を持ち合せてゐた彼女は、欣也が、
世間に、美醜を乗り越えた評價を博すに至るには、やたらに美醜の判別を付けさせないのを得策

とした。おしなべて藝道や藝事の世界においては、理窟で解せぬ人氣といふものは立つもので、繪を書かずして畫壇に現れ、ろくに文章を弄することなく、文壇の名聲を保持して生きてゐる人間がある。彌千代が、どこまで、その理を意識下に辨へてゐたかどうかは疑問であるが、結果としては、まさしく欣也がそれに似た存在を勝ち得てきたのは事實であつて、又、そのやうな頃はぬ鶯といふものを、世間に對して押し立てていくために、彌千代は、そこでも、得意の商才を發揮して面白い事業を戦争前から營んできた。

いま、彌千代が欣也と共同で經營してゐる東京音樂出版社は、彼等の豊かな生活を支へるために缺くべからざる財源になつてゐるが、同時に、欣也が一種の音樂評論家として世を渡つていくためには、絶對に必要な足場である。欣也は、音樂出版社から樂譜や數々の書物を上梓し、つねに、モーツアルトだの、チャイコフスキだのといつてゐる人間どもと手厚い交りをつ結んでゐるが、彼等の樂壇における名聲が、少からず餘光となつて欣也自身の内なる輝きだと錯覺させるわけであつた。

けれども、彌千代は、欣也の資質を決して輕んじてはゐなかつた。彼女には夢があつた。動機や過程に、よしや多少の不純さがあつたとしても、詮じつめれば、この欣也には衆にすぐれた高

實な藝術家魂が備はつてゐると信じてゐたし、信じたくてならぬのである。すでに金もたつぷり出来たし、彼の名聲の輝き出すのを手ぐすね引いて待ちかまへてゐる連中もある。だから彌千代は、欣也が立派な藝術家として伸びるための、あらゆる出費や心盡しを傾けて悔いぬ一方、もし、彼が、そんな彌千代を裏切つて、名もなき市井の泥臭い女給風情に、ウツツをぬかしはしないかと只管怖れてゐるのであつた。

「ねえ、あなた。あたくし、野暮はいはないつもりよ。——それが、ほんの遊びだつたら、あたくしも安心なのよ。でも、もし、あなたが、かりそめにも、下等な女に惹かされるやうなことがあつちや、あたくし、我慢が出来ませんよ。あなたは、それを、單にあたくしのやきもちと考へるかも知れないけれど、それは飛んでもない大まちがひよ。なぜなら、あたくしが傷つく前に、先づあなた自身が汚れるのよ。あたくし、それが何より怕いわ。それは、墮落よ。そして、あたくしの命取りだわ。ねえ、あなた、たとひ、どんなことがあつても、あくまであんな女たちを相手にする時、遊びといふことにしてちやうだいね。假りに、本氣で惚れ込んだり、引きずり廻されたりなさるやうに、よくよく考へて行動して下さいな。もし、變てこな女なんかとしよになつたら、もう、あなたの藝術もこれ以上は伸びはしないわ。きつと、それが命取りになつち

やふわ。あたくし、それだけが心配でたまらないのよ……」

欣也は、彌千代に掻き口説かれるだけはあつて、實は、これまで要領よく多少の漁色は試みてきたのである。しかし、つねに齡上の彌千代の瞳が光つてゐるので、思ひ切つたことも出來ず、さして未練はないながらも、まだ食ひ足りない淡い思ひを残したまま、いつ果てるともなく袂を分つた女たちが何人もゐた。もつとも、それは彌千代に對する知らず識らずのズスチュアがさせる業で、内心、欣也も、別れて氣懸りになる女もゐないわけではなく、又、事實、子を孕ませた女も一人ではない。彌千代に一切を嘆き付けられて、その女との別れ話や生れた子供の處置などを殆んど彌千代が快刀亂麻の鮮かさで切り廻して納めてしまつた件もあるし、反對に、欣也が隠れて當の女とその子供を處理したり、或は子供が生れると承知しながら、金で片附けて逃げてしまつた例などもある。そのやり口は、概して要領のいい手際を示し、いかにも袖に振りかかつた露でも打ち拂ふやうなポーズに終始したし、欣也はそれを彌千代に對する一種の思ひやりだと信じてゐるのだけれど、案外、彼の生得の女性蔑視や人間蔑視が土臺となつてゐたかも知れない。しかし、とにかく欣也が女と遊んだあとで、さういふ相手を軽く片付け、さしたる拘泥を示さないのが、彌千代にすれば、せめてもの慰めにちがひなかつた。彌千代はさういふ消極的な自己満

足だけで、その生き地獄の苦しさをやつと堪へた。欣也に女が出来たらしいと覺ると、彼女はあらゆる方法を驅使して、正確なその情報をキャッチしようと努めるし、一方では、そんな欣也をあの手この手でわが身に惹き付けてみようとする。齡甲斐もなく、彌千代が所謂ニウ・ルックの毛羽立つやうな荒い格子縞のブラウスなんかを着込んで、ややもすると二十の娘も顔負けしうな恰好で銀座などを歩いてゐるのは、何も單なる酔興ばかりとはいへなかつた。彼女は、欣也に出来た女が、どうやら洋装のよく似合ふ女らしいと見てとると、その十倍もの金を掛けて、すぐさま見えざるこの敵との決闘を企てるのだ。彌千代が望めば、いまの日本で手にし得る最高の服飾は、わけなく彼女の身邊を飾ることになるのであつて、いかに相手が逆立ちしても及びはない。だいいち、欣也の對象になる女も、さして廣汎な層には及ばず、大概、女給かダンサアか、せいぜい音楽畑の若いジャナリストといふ程度のものである。彼女たちは、氣違ひじみた彌千代の容姿を、蔭で大いに笑ひながらも、次第にそこから壓迫感を覺えてきて、あまりにも掛け離れた、彌千代と自分たちとの暮しむきの相違から、意識せずして欣也の不實を探り出すやうになるのだつた。女給のアグリは、そのやうな女たちの一人であつて、世に謂ふ酸いも甘いもわきまへた女であつたが、やはり、欣也と關係を築くから、彌千代の派手な身邊にやたらと反撥を感じ